
雨の森

はやとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の森

【Nコード】

N01220

【作者名】

はやとん

【あらすじ】

森の入口に立つと出られない。

人里知れぬ場所にその森はあった。鬱蒼と林立する木々、止まない雨、命の気配を感じさせない空気、低く立ち込める雲。僕は、一際高い大木に寄り掛かり過去を想う。僕も二十歳になる。この長くも短い間にたくさんの人と出逢った。僕の感覚の中では、出逢ったというかすれ違った。多くの人が僕の前で足を止め、暫くするとまた違う方向に歩き出した。僕に残していったものは、僕の心を繋いできたけれど、そろそろ限界みたいだ。命が消えるのではない。ただ僕の身体がこの森の一部になるということだ。この世界に思い残すことなどない。

僕は一応医学部生だ。肩書を最初に言うのは卑怯だと思うが、学歴コンプレックスのせいではない。けれど僕は自分を説明するのに「医学部生」というラベルは都合がいい。大抵の人はそれを聞いてお世辞でも尊敬したような様子を見せてくれるからだ。親も医者だった。田舎の開業医で、小難しい人だった。僕はいつも人の役に立つ人間になれと言われ育ってきた。けれど、今となっては綺麗事のようにしか聞こえない。ただ、ここまで勉強に闇雲になつてこられたのは、勉強ができるということが一種のステータスだったからだ。

僕は今まで多くの人を失ったけれど、特に何も感じなかった。またいつか出逢えるという言葉信じていたわけではない。ただ、別の人とその心の隙間を埋めてくれた。埋めるというか紛らわしくてくれた。

彼は冷たそうに僕にこう言っていた。「生きているのではなく、ただ死なないようにしているだけ。」と。僕は明日にはこの大木の一部になる。枝葉は時に風雨にさらされ大地にかえるだろう。今思い出すのはあなたが僕の前から消えた時も、この森のように雨が降っていた。僕の心の中に音もなく雨が降っていたように、彼の心の中

にも雨が降っていたのだろうか。一つわかるのは、きっと今の僕と同じように、きっとこの世界に思い残すことなどなかったはずだ。僕の空には鉛の雲が立ち込め、鉄でできたぜんまい仕掛けの鳥が飛ぶ。僕の身体の中には得体の知れないどす黒い血が流れ、脳は有刺鉄線で結ばれたニューロンがこれでもかというほど張り巡らされている。そんな着想が頭から離れない。僕は小さいビニール袋に入れた安定剤を十数錠取り出し、口に放り込み、ポケットサイズの安いウイスキーで流し込む。これで少しはましになるはずだ。

彼は僕の前輩で研修医だった。いつも明るく振る舞い、人の輪の中に常にいた。誰もが突然いなくなるなんて思いもしなかった。僕は、彼に忍び寄る薄暗い闇を知らなかった。いや、気付いている人なんていなかった。ただ、僕の頭から離れないのは彼が言っていた「死なないようにしているだけ」という言葉だ。

雨の森は誰も拒否しない。その代わりに、心の中に住みつくとして離そうとしない。僕にもその森はある。誰しもが持っている。その奥深くへ進もうとすればするほど深みにはまるとも知らずに、人は森に分け入り迷宮に陥るのだ。

今日僕は息絶える。この森の奥底でひっそり息を潜めて、誰にも気付かれないこの場所で。もう一度言っておこう。僕の命が消えるのではない。僕の身体がこの雨の森の一部になるということだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122o/>

雨の森

2011年2月3日04時16分発行